

* 現存する日本最古(?)の天文台ドーム

東京天文台 75 周年誌には本郷時代の天象台の写真が載っている(写真1)。観象台が天象台と气象台に分かれたのは明治15年(1882年)2月のことである。写真1はその頃の天文台であろう。また同誌には麻布時代の東京天文台の写真(写真2)も掲載されている。麻布時代の天文台は明治21年、海軍省の観象台の跡地に設立された。これらの天文台ドームは現存していない。麻布時代の天文台は関東大震災で壊滅し、三鷹に移転したからである。



本郷時代の天象台



麻布の旧天文台

写真1 本郷時代の天象台

写真2 麻布時代の東京天文台

在野の天文学史研究家の佐藤利男氏が日本最古の天文台ドームに案内してくれるというので、木下名誉教授、谷川清隆氏、佐藤英男氏の3人を誘って5人で探索に出かけた。

その日本最古の天文台ドームは現在の東京海洋大学(旧東京商船大学)構内にあった。商船大学においては、船舶の航行には天測による船の位置を知るため天文学は必須であった。そのため天文学実習のために天文台が必要であり、ドームは、一つは子午儀用、もう一つの大きい方は赤道儀望遠鏡用の2つが残っている。それらのドームの前には案内板が設置してある(写真3、写真4)。

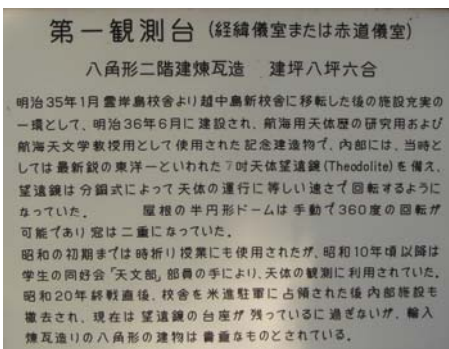


写真3 第一観測台の説明

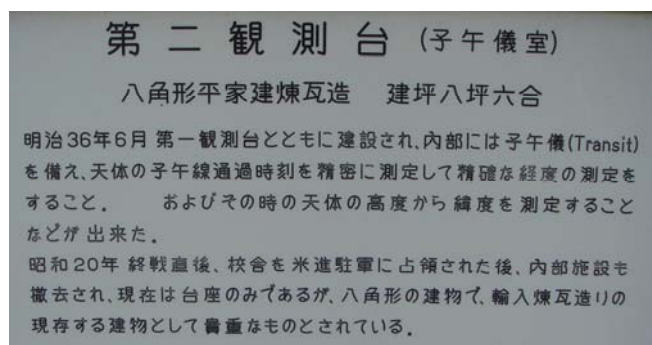


写真4 第二観測台の説明

子午儀用ドームは「第二観測台（子午儀室） 八角形平屋建煉瓦造 建坪八坪六合 明治 36 年 6 月第一観測台と共に建設され、内部には子午儀（Transit）を備え、天体の子午線通過時刻を精密にそくていして精確な経度の測定すること。 およびそのときの天体の高度から緯度を測定すること等が出来た。昭和 20 年終戦直後、校舎を米進駐軍に占領された後、内部施設も撤去され、現在は台座のみであるが、八角形の建物で、輸入煉瓦造りの現存する建物としては貴重なものとされている。」との解説がある。大きい方のドームには「第一観測台（経緯儀室または赤道儀室）八角形二階建煉瓦造建坪八坪六合 明治 35 年 1 月霊岸島校舎より越中島新校舎に移転した後の施設充実の一環として、明治 36 年 6 月に建設され、航海用天体暦の研究用および航海天文学教授用として使用された記念建造物で、内部には、当時としては最新鋭の東洋一といわれた 7 呎天体望遠鏡(Theodolite)を備え、望遠鏡は分銅式によって天体の運行に等しい速さで回転するようになっていた。 屋根の半円形ドームは手動で 360 度の回転が可能であり窓は二重になっていた。 昭和の初期までは時折り授業にも使用されたが、昭和 10 年頃以降は学生の同好会「天文部」部員の手により、天体の観測に利用されていた。昭和 20 年終戦直後、校舎を米進駐軍に占領された後内部施設も撤去され、現在は望遠鏡の台座が残っているに過ぎないが、輸入煉瓦造りの八角形の建物は貴重なものとされている。」と解説されている。子午儀ドーム（写真 7、8）は回転する必要はないのだが、丸屋根のドームであった。また、大きい方のドーム（写真 5、6）は 7 呎の天体望遠鏡（Theodolite）が設置されていたとあるが、7 呎望遠鏡なら恐らく赤道儀望遠鏡であろう。その頃 7 呎の経緯儀があったとは思えない。



写真 5 第一観測台の正面



写真 6 第一観測台の裏手から

東京天文台の前身である東京大学天象台、麻布の海軍省観象台の天文台ドームは写真 1、写真 2 のように台形型のドームであるが、明治 36 年（1903 年）建設の商船大学の天文台は建物は八角形、屋根は丸屋根のドームである。建設された 15 年の違いがこのようにはっきりと出ている。東京天文台に残っている最も古いとされているドームは三鷹のキャンパスに建設された 20cm 赤道儀望遠鏡用の第一赤道儀室（写真 9）であるが、それはコンクリート造りで、商船大学に建設された煉瓦造りの重厚さはない。子午儀室の第二観測台の建物は、ほぼ同様の形式であるが、平屋作りである（写真 7、8）。



写真 7 第二観測台正面

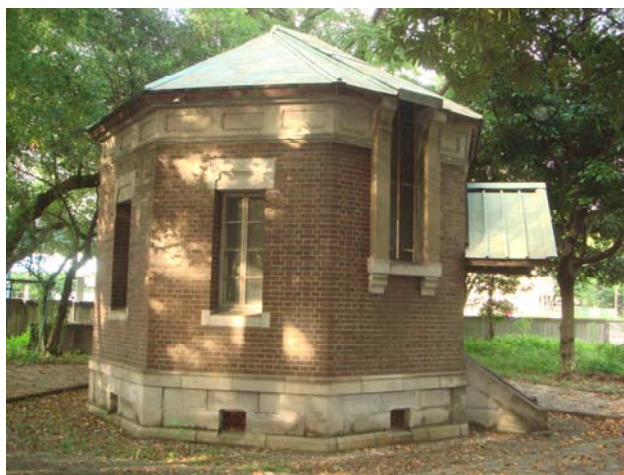


写真 8 第二観測台側面

明治 36 年建設のこれら天文台ドームは、重厚感があり歴史の重みを感じさせる、大正 10 年に建設された国立天文台最古のドームが文化庁の登録有形文化財になっているが、こちらも当然、その価値があるものと思われる。

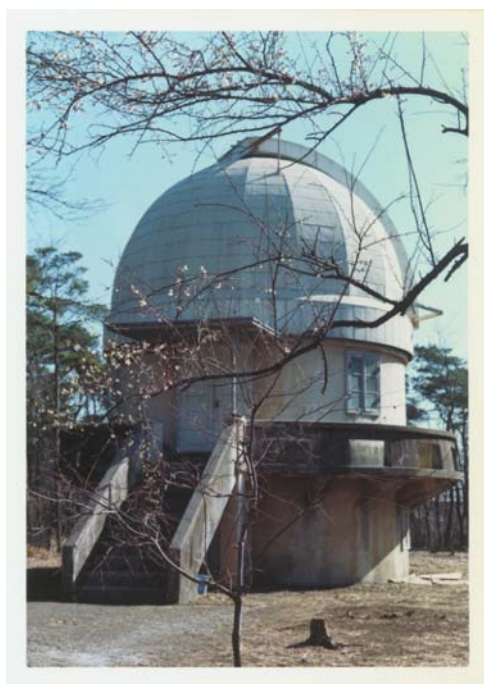


写真 9 国立天文台最古のドーム